

2020 年度審査学位論文
「フッサール現象学における習慣性概念の研究」要旨

文学研究科博士後期課程 4110140005 増田隼人

本論文は、エドムント・フッサール(1859年-1938年)の現象学における「習性(Habitus)」ないしは「習慣性(Habitualität)」概念の敷衍的理解を試みるものである。習慣性概念は彼の初期の静態的現象学と後期の発生的現象学を架橋する鍵概念であり、また、その働きの実相にあつては能動性と受動性、理性と衝動、固着と適応等々の相対する性質が混ざり合った多義的な概念となっている。フッサールの膨大な草稿群の中にあつて、「習慣性」や「習慣的」という術語は実に多岐に渡るテーマを跨って登場するが、そのことがむしろ、彼の習慣性概念を私達の一元的な理解から逃れさせる一因ともなっている。しかし、かかる事態はむしろ、私達に備わった習慣の現実を忠実に描いているようにも思われる。人間の活動のどこまでが習慣的で、どこまでがそうではないのか。端的に言えば、それがフッサール現象学を通して本論が考察する一貫したテーマである。

第一章

そもそも、現象学者にとって、習慣とは、最初に取り払うべき厄介な目隠しである。現象学的還元が自然的態度における素朴な世界信憑や定立作用を遮断し、括弧に入れ、エポケーを通して判断停止させるのに対して、習慣的となった行動は、能動的な意志の定立に先立って、「思わずそうする」、「無造作にそうする」といった性質を備えている。これは現実化される行為に限らず、習慣的となった判断やその動機づけにおいても通底しており、習慣はあらゆる意味で盲目的な傾向性としてそこで機能しているように思われる。自然、現象学の開始時点においては、習慣はドクサ的な「思考習慣(Denkgewohnheit)」として、現象学的還元を通して考察の俎上から意識的に排除されていた。

しかしながら、フッサールのそうした姿勢は、その分析の中に、「コギト」の主観としての純粹自我を導入したことを契機に趣を変える。この純粹自我は当初こそ、体験から独立した「空虚な極」として捉えられていたが、次第にフッサールはその狭義の概念を拡張していく。すなわち、純粹自我は、「庭」や「地平」と呼ばれる可能性の圏域を持ち、継起する体験の流れを生き抜く自我生の担い手として捉えられるに至ったのである。そしてその結果、そうした変転の流れの中にあつても一貫して持続しているものがあること、すなわち自己の「習性」を捉えるに至るのである。それは次々に継起する体験流の中を生きる自我が、自己を持続する同一の自我として把捉するのを可能にする「自己同一性」の源であり、ここにおいて純粹自我は、固有の個性を持った自我として、受肉される。そしてまた、生成と変化を必然的に備えた習性概念をその分析に引き入れたことで、フッサールの議論が「発生」の次元へと転回しはじめたことがここで指摘される。それは「純粹自我の習性的思念」として

限局した意味しか持たないにも関わらず、多様な問題領域を引き入れる呼び水となっているのである。そして、自我の諸作用をその背景において基づける、潜在性ないしは受動性としての習慣性概念もまた、ここに含まれてくるのである。

第二章

広義の意味で言えば習慣化とは、以前の体験が痕跡として残って後の体験に影響を与えることだと言い得よう。しかしそれでは、以前の体験が残るとはどういうことか。そもそも純粹自我の「持続的思念」などと言われるところの「持続」の意識とは如何にして作られるのか。そうした問いが自然と浮かんでくる。第二章においては、習慣性が習慣性として形成されてくるために必要な本質規則として、受動的志向性の諸能作の考察が行われる。まずはそれに先んじて、フッサールにおける習慣性概念が、彼の志向性概念の諸区分に応じて「能動性における習慣性」と「受動性における習慣性」として捉えられることを指摘し、後者の習慣性の分析は過去把持や連合といった受動的志向性の諸能作の分析、すなわち発生的現象学の分析と一体となって進行せねばならないことが論じられる。

そこにおいてはまず、自我の反省以前の次元、自我の作用そのものを構成する先構成の次元の存在が「原意識」の解明と共に開示され、諸体験の持続統一を形成する受動的な能作として過去把持の諸特性が注目される。とりわけ、習慣性の形成との関連においては、過去把持の交差志向性——与えられた体験の過去への沈み込みを表わす沈殿化の分析との相関性が強調され、それこそがまさに過ぎ去った諸体験の統一と留まりを為し、習慣性を形成するための第一の能作として捉えられる。そしてさらにまた、連合——とりわけ受動的綜合としての原連合が、自我の対向以前の先構成の次元において、諸体験をそれぞれの統一として取り纏める規則として考えられ、これが過去把持と同様、習慣性の形成において不可欠に必要な能作であることが考察される。この連合は、類型の形成と類縁的であり、私達の知覚世界がこの類型的の世界として捉えられていること、そして、それが二次的受動性としての習慣性の働きとして捉えられることが示される。類型化は私達の知覚認識を先意識的に基づけるが、それは遡ればさらに、触発や衝動といった動機づけの原現象によって基づけられる。そして、これらの動機づけが未来予持的な予期の志向として自我の活動を根底において方向づけ、自我の可能性の範囲を規定していることが指摘される。ここにおいて習慣性は、受動性——とりわけ、自我の能動的な諸作用が受動性に転化したところの、二次的受動性としての性質が強調されることとなる。

第三章

第二章において習慣性は、予期や類型的な地平として自我の可能性の範囲を規定していると論ぜられた。しかし習慣とは、往々にして私達の可能性を狭める機械的傾向ないしは機械的行動としてみなされるものである。第三章では、こうした観点から、習慣と能力、あるいは習慣と発達、ないしは学習の関係を中心として議論が展開される。

そこにおいてはまず、前章までの議論を踏まえてフツサールの習慣性概念が、自我の経験を網羅的に跨り、あるいは通底し、先自我的次元に自我の活動の方向を基づけているものであることが確認される。このことはフツサールが習慣性ないしは習慣性の形成を人間存在の本質として見做している証拠でもあるが、同時にそれは彼の習慣性概念の輪郭を曖昧にさせることにも繋がっている。こうした観点からフツサールとの対比として、ギルバート・ライルをはじめとする諸研究者による習慣の概念規定が紹介される。そこでは、習慣を人間の諸活動における機械的な自動性という、狭義の範囲に確定させようとする試みの困難さ、意識的行為と習慣的行為の境界の曖昧さが指摘される。

こうした考察を受けて以後の節では、習慣の機能を意識から分断するのではなく、むしろ習慣を意識活動そのものの中に不可避に混入されているもの、意識の高次の活動に積極的に寄与するものと捉え直し、フツサールの「能力」の概念に議論を進めた。そこにおいて考察されたのは、フツサールにおいて能力の概念は、動機づけや類型などと同様に習慣性という包括的概念のうちに含まれていることであり、自我の自発性すらも、それを可能とする受動的総合における習慣性の形成と共に発達してきたということである。

さらに、受動的な習慣性の機能が高次の能力の習得や作動において果たす積極的役割を示す実例として、スポーツ運動学における「コツ」と「カン」の現象学的研究を取り上げ、自我の高次の身体運動を成立させる受動的総合の不可欠な役割を強調する。これはすなわち、「受動的習慣性」の生き生きとした具体的事例でもあり、運動学習における「慣れ」——換言すれば「コツ」の習得が、究極的には受動的総合としてしか生じえないこと、そして、極限の集中力を要する技巧の只中であっても、そうした習慣態として身についた「コツ」が、過去把持や未来予持に基づいた「動感メロディー」として、高度な技芸を可能にすることを明らかにした。これらの流れを受けて本論の最終節においては、フツサールにとって人間の最も高次の創造的営みである現象学の営みにおいてですら、そこに習性ないしは習慣性という視野が収められており、フツサールはそこに受動的な先構成のプロセスの寄与を認めたいことを指摘し、論を締めくくる。